

私に影響を与えた 1冊



上石高生

現象心理学ではあるが、徹底した言葉による分析が繰り広げられている。これが私にとっての言語分析であるのだが、それは分析哲学のようにではなく、ビンスワンガーのように思考したかったのである。

我々が目にする中にも“失敗した現存在のいくつかの形式”がある。

去年の6月17日からテレビ東京で「岡村隆史ガチお見合いスペシャル」が放送された。それが今年2月3日の放送では、交際4回の女性の、過去に交際していた男性が有名人（週刊誌が暴露）で、一度、岡村さんとバラエティーで競演をしていたことが「どうしても気になって仕方がない」という理由で、「2、3ヶ月考える期間が必要」と交際を中断した。

根本的に大きな矛盾がある。

そもそも募集したお見合い相手の女性たちが、有名人嫌いなら応募はしない。有名人好きだからこそ応募し、また過去にもそんな人と付き合うことができた。岡村さんが選んだように。

ここでは二重の仮面が存在する。1つは、お笑い芸人として、もう1つは普通の男性のように恋愛を楽しみ結婚することができる、という仮面である。

しかし本質は、デート中に恥ずかしさで自己に集中してしまったり、結婚観では偏った考えに固執してしまっている。仮面の奥では、相手の気持ちに気付くことができず、将来的には、まだ結婚もしていないのに浮気という脅威に圧倒されてしまっている。それで結婚に向けた交際は、取るに足らないことで張りつめ、予測不能な気まぐれな言動となる。

それでも力強く張り付いた仮面と、周囲から温かく見守られることで正しく理解されず、本人もその奇妙な本質に向き合えない。その輪郭のぼやけた思考と様式的硬化は、自分の世界の傍らに立ち、そこで伝統や風習、身分を生み出すことで、自己形成の展開が生じないでいる。いつまでも子供のままで、空虚であり、その直観の狂いは、いつも問題解決を阻み、うまくいかず、いつまでも孤独だ。

全ては岡村隆史のために用意されたもの、デートではテレビカメラに見守られ、スタッフの手配通りにより動き、また進行する。それでも周囲や相手の予期しない態度や感情に出会って“恥辱”を感じるのは、自分でない者になろうとしているため、本来の自分を見透かされる不安を抱えているからである。

スタッフは岡村さんを保全し、本人はテレビ製作へと没頭していく。彼女の喜びのため、という意識よりも、自分の偏った理想に操作し、ねじ曲げ、酷使する。だからこそ彼女が結婚について語るとき、「気を遣って、気を遣いすぎて一緒に暮らすのも、それもやっぱり疲れちゃうし」という言葉になる。

本人は自分自身を尺度とすることで、愛するという人間性を失い、しかも限界に達している。

お見合いからデートへと発展した女性は、テレビに出たことで世間に顔を知られ、その結果、帰宅途中で後を付けられた怖さを岡村さんに語っても守ってはもらえず、交際の延期を伝えられるだけという残酷な仕打ちを受けることとなる。消極的な攻撃として彼女を責めているのだ。岡村さんは、それを当然と思っている。「過去に有名人と付き合ってはならない」という一貫性と、その特異的な否定的制限が、冷たく、硬化し、コミュニケーションの基盤を失い、いつまでもそこで対立する。全ては彼の個性として間違っ理解されているのだ。

この自分自身の特別性の几帳面すぎる一貫性の不毛な追求は、過去を許し合って結婚に至るとい普遍性から逃れ、ただただ自分自身の個別性のために存在しようとする。そのために普遍的理性や優性に反抗する。

過去に有名人と付き合っていた、ということが否定的に感じられるのは、岡村さんの原理、理想、規則などの主張であり、それはとりもなおさず自己の唯一性から、共世界に対しての反抗なのであるが、それこそ結婚の覚悟がない、状況を切り開けないことを隠蔽するためのものだ。両者の正しい程度や調和には関心がない。

この否定的に固執する狭量は、たとえどんな女性であろうと、その几帳面な一貫性に、付き合いは立ち往生してしまい、自由な将来を不可能にするだろう。

普通の結婚生活という理想は、普通の男性のように振る舞う誇張で失敗する不安と、自分自身であらなければならない不安から、全ての他者からの抑圧を受けることとなり、それで考えすら不自然となり、まともになくなると、必要に迫られて克服しようとする絶望的な試みに代わって、“自立的に愛する”という不可能性および放棄の方が平安に至ることに気付く。

沈黙して将来の不安を自ら要求できない自己、自己超越できない実存は、将来の自由な可能性を放棄し、次第に自己の存在に関心を持たなくなり、ただその不確かな現存在を保全してくれる場所にだけ留まることとなる。